“It is time!” 子どもたちが変わるとき
―小学校と大学におけるドラマワークショップ実践から
ドラマ教育の可能性を探る―

阪本由貴[A]，北野ゆき[B]，竹田里香[C]

アブストラクト: 英米では一般的な「ドラマ教育」。しかし，日本ではまだまだ認知度が低い。今回，小学校と大学というまったくコンテキストの異なる現場でミュージカルの劇づくりワークショップを行った。児童も学生も大きな変化を見せた。本発表では，実践者と担当教諭から，ワークショップの内容と，児童や学生の振り返りなどから，自信のなさを抱えていた子どもたちがどのように自信を持ち，自分の居場所を作っていったかなどを発表する。

キーワード: 演劇教育，英語教育，ミュージカルワークショップ，協同学習

1　はじめに

日本では、「演劇」,「ドラマ」というと特別な人がするもの、学芸会のように特別にするものという意識を持つ人が多いようだ。しかし、欧米では、クリエイティブドラマ、Drama in Education（DIE）,プロセスドラマなどと呼ばれ教育に密着している。また、平田・蓮行(2011)によると、フィンランドの国語の教科書では、各単元の最後が演劇的手法になっていたり、ニューカマーの多いカナダやオーストラリアのような多民族国家では、演劇教育が盛んであると述べている。

2　背景

2.1 学校教育のドラマ

小林他,（2010）は、学校教育のドラマとして考えられる領域は 4 つあり、第 1 に個人的・社会的教育として、第 2 に国語という教科の中におけるものとして、第 3 に芸術教育として、第 4 に教科を教えるための媒介・教育方法としてのドラマである。そして、それぞれの領域によって目的と方法論に違いがあると述べている。

2.2 言語教育でのドラマ

Stern(2006)は、ドラマの活動は、第 2 言語学習者のコミュニケーション能力を上げるといっているが、それらは、motivation, empathy, sensitivity to rejection, self-esteem, spontaneity といった心理学言語学的な共通の要因があると主張している。

2.3 ドラマの有用性

今回行われた 2 名に指導者によるドラマは、以下の 6 点の項目において、言語学的にだけでなく、教育学的にも有用であると考える。言語学的には、①場面と情動が組み合わさっての意味のあるインプットから発表までのアウトプットをすることで、エピソード記憶に残りやすい、②インプットを行う際に身体を使い、英語の音声的特徴（シラブル言語、強弱アクセント、リ

A: 姫路獨協大学，英語芸術学校マーブルズ講師
B: 守口市立さつき学園
C: 立命館大学

エゾンや脱落など）を体感することで、リスニング能力の向上にもつながる、③相手に伝わらなければ意味がないところからイントネーションや声量、間、速度、ジェスチャー、ポスチャーといったノンバーバル的側面等に自然に注意が向けられることがある。教育学的には、④講師、仲間と共同してドラマを完成させる過程で成長（Vygotsky,1978）し、⑤自己効力感が育つ（Bandura, 1997）、⑥動機づけでも、自己決定理論を支持する自律性、有能性、関係性の欲求が満たされ内発的動機づけ（Deci & Ryan, 1985）が上がると考えられる。

今回のシンポジウムでは、小学校と大学でどのようなドラマワークショップが実践されたのかの概要を説明した後で、児童や学生がワークショップを通してどのように変容していったのか彼らの振り返りや作文から紹介をする。また、何が要因でこういった変化が起きたと思うのかについてディスカッションを行いたいと考えている。

4　実践報告

4.1　大学での実践

2017 年度より関西の私立大学で阪本が担当する『英語ドラマ・プロダクションⅠ・Ⅱ』では、英語ドラマワークショップを通して、英語を自分の生きた言葉として話すこと、英語の発音・イントネーションを上達させること、メンバーと協力して英語ドラマをつくりあげること、また、各自が新しい自分を発見し受け入れることを目指している。

授業は前期・後期それぞれ 5 日間連続の夏季集中講義（1 日に 90 分授業を 3 コマずつ）として開講され、最後に約 60 分の最終発表を含む時間で行われている。

この授業で講師を務める筆者の阪本由貴は、2005 年から英語芸術学校 MARBLS で小口真澄氏のアシスタント講師として従事し、その間に英国にてドラマの修士号を取得。本講座は学生からの評判も非常に高く、大学から信頼を得て、次年度からは『英語ドラマ・プロダクションⅢ・Ⅳ』が増設されることとなっている。

4.1.1　対象

本実践は、2021 年 8 月 23 日~27 日（前期）、8 月 30 日~ 9 月 3 日（後期）の合計 10 日間で、前期 7 名（2 年生 5 名、3 年生 2 名）、後期 8 名（2 年生 6 名、3 年生 2 名）を対象に行われた。後期は、最初は 3 名のみ参加予定だったが、前期のみ履修予定だった学生 5 名が「楽しかったから」と後期も引き続き参加してくれることになり、合計で 8 名となった。

4.1.2　活動内容と感想

前期はミュージカル『ライオン・キング』、後期は新聞売りの少年達のストライキを描いたミュージカル『ニュージーズ』に取り組んだ。なお、ワークショップは日程的には同じようなスケジュールで行うため前期・後期とも同じ欄に記載したが、学生にとっては 1 週目（前期）と 2 週目（後期）で参加した感想や観点に差があるため、学生のコメントの最後にいつの感想なのかを明記した。

1 日目はウォームアップと歌の導入、台本を配布して役決め。役は学生自身の希望を取って決定している。

「体で表現して英語を覚えていくのはとても楽しかったです。動きがあると覚えやすいと学びました。」（前期）

「初日は、「家出たくないな〜」「何で履修したんやろ?」とか思いましたが、お陰様で楽しく、この五日間楽しく続けれそうだと思いました。」（前期）

2 日目は冒頭のシーンからの練習。1 日目にセリフの録音を Teams で共有し、その音声を聴いて各自家でも練習できるようにしている。

「コンプレックスだった声を褒めていただけて、

最初に比べてとても気が楽になりました。」（前期）
「英語で書かれている事そのままでは、本当に言いたい部分は何かを考えないと役にも反映できないと知ったので理解しつつやってかなくてはいけないと思いました。」（後期）
　３日目は続きのシーンからの練習。
「安心した部分と、情けないと思う部分が交錯しています。日頃の教室での授業より、男子が生き生きしていたので、ちょっとびっくりしました。練習を積み重ねることによってみんなの演技がよくなっていくのを感じます。月曜日、火曜日と、気分が沈んでいましたが、明日は少し元気に行けそうです。」
「演技の楽しさや難しさを一番学んだ日になったと思います。」
　４日目は最後のシーンの練習と通し練習。
「昨日と比べると声の大きさが出しやすくなったように思います。プレッシャーも大きいが、この役を通して自信がついてきている。他の人と話す機会も少しずつ増えているのも嬉しい。」（前期）
「だんだんと結束力が見えてきました。明日、本番なので、みんなの責任感が、急上昇です。」（前期）
「仲間意識がでてきてとても良いなと思いました。」
「達成感を感じました。」（後期）
　５日目は通し練習の後、外部に向けたホールでの発表。
「自分自身では最高のできでした。月曜日、火曜日と、ぐずぐず言っていた私は一体何なのでしょうか？追い込みのリハーサルで、みんなの熱気が昨日と違うのを感じました。男子はかっこよく見えました。大学に入って、二年と、半月。初めて、青春を感じました。」（前期）
「大学では周りを敵だと考えて、弱い自分を守るために殻に閉じこもっていたなと感じた。もっと自分をさらけ出せるよう、少し意識を変えてみようと思った。」（後期）
「仲間との絆や成功した喜び、自信、一生懸命取り組む姿勢など沢山肌で感じられてとても貴重な時間と経験になったと感じました。振り返りを書きながら泣きそうですがそのくらい想い入れが残った授業でした。」（後期）

　また、前期・後期それぞれの修了後にはレポート提出をしてもらった。
「１日目はこんな量絶対無理セリフ多い〜って思っていましたが、少しずつ完成形に近づくにつれて、ここの場面はどんな風にしようかなとかどんな気持ちだろうと考えて頭の中はシンバでいっぱいでした。皆の迫力と本気さで本番中は不安な気持ちはほとんどなく、やり切った感動がとても大きかったです。ちょっと前の僕ではこの授業は履修していなかったと思うのですが挑戦してみて今は自信に溢れた感じがします。」（前期）
「この五日間で失敗や自分のコンプレックスを気にしない・恐れないことの大切さを学びました。」（前期）
「自分を肯定することが絶対に許せないことでしたが、この１週間だけは私も自分を肯定しようと思いました。」（前期）
「台詞を言えなくても、劇は進む。気にしないことができた。これは私にとって大きな成果だ。観客の多いことが私を奮い立たせた。こういう自分を初めて発見できた。」（前期）
「人と話すのが苦手だったが、その原因でもあった声を褒めていただいたことがかなり自信になった。自分の可能性を信じることの大切さを感じた。今までにない程大声を出し続け、自分を表現することの恥ずかしさが薄れていくことに楽しみを感じた。責任感と自信が身に付いた。」（前期）
「最初心のバリアの様なものを貼っていた。ありのままを曝け出すことを恥ずかしがり、また恐れていたが、日が経つにつれて演技や歌の時に

声を張れるようになり、失敗を恐れなくなった。講義初日は自分さえ良ければそれで良いと思っていたが、一人一人が皆に足りない部分を補って、皆が１人の足りない部分を補う。まさにワンフォーオール・オールフォーワン。」（前期）
「小さい時から内向的で、中学は半分以上不登校&引きこもり、初対面の人と話したり、仲を深めたりするのがすっかりできなくなりましたが、話しかけることへの抵抗感は減った様に感じる。恥ずかしさを感じた時、「今は恥ずかしさを感じている場合じゃない」と思って、今に集中したら、思いの他羞恥心を感じずにいれた。」（前期）

「最初は後悔をしましたが最終日には今まで取った授業の中で一番楽しく意味のある授業だと思いました。」（後期）
「自粛が続いた中でこの 2 週間は本当に充実した毎日だった。ほとんど関わりがなかった人たちが今では力強い仲間のように感じます。この 2 週間で自分でも成長できた。」（後期）
「いつも失敗を恐れ、嫌われることを妄想し、前に進めない私には『間違っても前に進むんです。』という阪本先生の言葉は衝撃的でした。『自分のペースでいいから、前を見て前に進むんです。自分の足で前に行くんです。』この２週間で体験したことを忘れたくない。」（後期）

「英語のセリフに感情と動きを乗せることによって自分の言葉として英語を話した感覚は貴重な体験だと感じた。」
「身体で表現したり、そのセリフの意味を自分で考えるとその英語の意味を忘れなくなる。今回の劇で新しく覚えた単語も未だに意味やどういう場面で使うか覚えている。」
「動きを使っての英語の授業はとても新鮮に感じた。動きと一緒に英語を口に出し、意味も既に確認してあるので覚えやすさの度合いが格段に上がるのを感じた。」
「文法をガチガチにしておかないとだめだと言うような中学生からの教育環境が生きた英語を学びにくくしているように思う。この授業では楽しみながら覚えているので今でもフレーズがポンポン出てくる。動きとコミュニケーションのおかげでこんなにも簡単に出てくるのかなと感じるので、日々発音したり使ってみることが大切だと思う。」

4.1.3　大学実践でのまとめ

本講座の受講理由には、「殻を破りたい」、「自分を変えたい」、「友達を作りたい」、「何もない学生生活で終わりたくない」などコロナ禍でオンライン授業が続く中、人との触れ合いや新しいことに挑戦するチャンスを求め、自分を変えたいと感じる学生が多く見られた。内気な学生たちが心を開くまでには少し時間がかかったが、お互いに協力する中で仲間意識が強まり、授業前に自主練をしたり、道具として使っていた脚立にあだ名をつけたり、心身ともにかなりハードなスケジュールだったにも関わらず１人も欠席せずに最後の発表を迎えられた事からも、この場が学生一人一人の居場所になっていったことが伺える。また、セリフに感情と動きがつくことで、英語が生きた言葉となり、より自分に近いものになったと感じる学生も多かった。この実践を通して、「間違ってもいいから、自分の足で、とにかく前に進む」ことを学生たちは体験し、少しずつ自分の殻を破り、自信をつけていった。

4.2 小学校での実践

小学校におけるすべての教育活動の目的は全人教育である。自分を含めたどの人も大事にする姿勢を学ぶところである。また、「なぜ」と立ち止まり、考え、言語化し、他の人の意見を聞き、さらに考え続けていくという学び方を学ぶところである。言語エキスポで何度か小口真澄氏のミュージカルワークショップを受講していた北野は、このミュージカルワークショップは

小学生の学びを加速させるものであると思い、担任している6年生を対象に、文化庁の「文化芸術による子供育成総合事業（コミュニケーション能力向上事業)」に応募した。

本実践は，2021年9月3日、11月12日、19日、12月3日の合計4日間，6年生2クラス（1クラスは約35名）に，100分授業を4コマずつ，最後に約30分の最終発表を含む時間で行われた。この事業で講師を務めた小口真澄氏は，アメリカでCreative Dramaticsを学び，帰国後2002年に英語芸術学校マーブルズを立ち上げ，ドラマ教育を通して幼児から高校生までを対象に英語を教えている。

ドラマでは相手を見ることや聞くこと、自分を表現する力が育った。決められた動きをなぞるのではなく、なぜこの場面でこのセリフが出てくるのか、なぜこの場面でこの動きをするのかを考えさせる。相手の動きをよく見て、それに対して自分はどう反応し、表現するのかを動きながら考えていく。正解のない問いに対して主体的に考え、協働的に創作する楽しさを子どもたちは味わった。

4.2.1　対象

ワークショップは小学校6年生70名2クラスで行った。

義務教育学校である勤務校は、前期過程6年間後期課程3年間の9年間の学びを実践している。1年生から9年生の発達段階を踏まえながら異学年交流を行ってきたが、このコロナ禍でそれもなかなかできない状況にある。前期課程最高学年の6年生は本来であれば様々な場面において前期課程の代表として前に出て表現し、お互いを磨いていくはずであったが、このような状況下でそれも難しかった。また、小中一貫校なので9年間をともに過ごす仲間であるが、ともすれば「この子はこういう子だ」といったんついたイメージによって、自らの殻を破りにくいとも感じていた。友達とともに自らを高め、ともに磨きあい、新しい自分、友達の新しい面を発見する場の設定が必要と感じ、ワークショップを行ってもらった。

4.2.2　活動内容と感想

1回目はオリエンテーション。

「先生が生徒たちの答えに対してめっちゃ深く聞くから、なんか今まで見てなかった部分まで見れて、新しいことがいろいろ分かった。あと、空気がざわざわしていたら、何度やっても上手にできひんことが分かった」

「英語が分からなかったけど、やればできる」

「まだ誰も英語できてないが、ジェスチャーでごり押し」

2回目は児童自身が決めた役で前半のシーンの練習。2回目ワークショップまでに台本を配布し、それとともに真澄先生のセリフの音声入りの動画をteamsで共有した。児童各自のタブレットで動画を見たうえで児童自身が自分の役を決定している。

「自信をつけるには練習するしかない」

「セリフが分からなくてもモジモジしない」

「最初はちょっと恥ずかしかったけど、やっているうちに楽しくなってきた」

「前より恥ずかしさを1/4ぐらい忘れられたと思う。前より2倍楽しかった。英語を忘れても伝わればいいと改めて思った。本当に楽しかった」

3回目は後半のシーンの練習と通し練習。

「役ひとつひとつに心をこめてやると、そのキャラクターになりきれるような気がしました」

「とってもみんながんばっていて気持ちよかった。楽しかった」

「シンバの気持ちはどうなんだろう・・・。シンバの気持ちになって演技をすることが大事だと気づいた」

4回目は通し練習の後、お互いのクラスに見せる発表会。

「前まではライオンキングなんてやりたくもな

かった。だって難しいし、恥ずかしいし。そんな気持ちでいっぱいだったのに今すごく楽しい。このライオンキングで自分は少し人見知りを直せただろうか」
「ライオンキングでみんなのいつもとは違う一面が見れた」
「楽しい。久しぶりにわくわくする。みんな一緒に協力する。なんて楽しいんだろう」
「みんなの力があって今回の劇ができたんだと考えるとすごいことだなと思いました」
「私はもう違う。はじめたときの私とは違う」

4.2.3 小学校実践でのまとめ

いろいろな課題を抱えている子どもたちが、英語、劇、歌、ダンス、といういろいろなハードルに対して、友達とのつながりによってそれぞれが努力して乗り越えていった。「努力すれば達成できる」「自分は変われる」という実感を子ども自身が持つことができた、貴重な経験だった。小学生にとっての英語のセリフは文字に頼れない。不安に思う子どももいたが、どういうセリフなのかを考えさせ、なぜそう言うのかを考えさせたうえで「セリフは間違ってもいい」「とにかく動く」を徹底していくことで、「チンプンカンプンのナゾの呪文」だった英語が自分のものになり、生きた言葉になっていった。

5　まとめ

ドラマでは、自分とは違う役に身を置き、決められたシチュエーションの中で相手と役の目的に集中する。その日常とは切り離された世界の中で自分でない役の人生を生きることで、本来の自分では体験しないことを疑似体験し、新しい自分の可能性を発見する。そして、それが自分の自信になる。また、状況に沿った英語のセリフが体や心と繋がると、それが生きた自分の言葉となり、英語を楽しく学ぶことができ、言語学習へのモチベーションが上がった。
「失敗を恐れず、自分で考え、前に進む」力を育てるドラマ教育は、どの年代の子どもたちにとってもその心身の成長や言語習得に大変効果的であり、ドラマ教育がより多くの教育現場で行われていくことを強く願っている。

引用文献

小林由利子，中島裕昭和，高山昇，吉田真理子，山本直樹，高尾隆，仙石桂子（2010）．『ドラマ教育入門-創造的なグループ活動を通して「生きる力」を育む教育方法』，図書文化

平田オリザ，蓮行（2011）．『コミュニケーション力を引き出す-演劇ワークショップのすすめ-』,PHP 研究所

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unified theory of behavioral change. *Psychosocial Review, 84*, 191-215.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior.* NY: Plenum.

Stern, S., (2006). Drama in Second Language Learning from a Psycholinguistic Perspective, *Language Learning*, *30*, No.1, 77-100.

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological process*. Cambridge: Harvard University Press.